様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　4 月　1 日現在

研究種目：　基盤研究（B）
研究期間：　2007　～　2009
課題番号：　１９３２０００２
研究課題名（和文）　西洋哲学との比較という視座から見た日本哲学の特徴およびその可能性について
研究課題名（英文）　Characteristics and Potential of Japanese Philosophy, compared to them of Western Philosophy

研究代表者
藤田　正勝（FUJITA　MASAKATSU）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：９０１６５３９０

研究成果の概要（和文）：日本の多くの哲学者は、１９２０年代から３０年代にかけてヨーロッパに渡り、現象学や生の哲学、哲学的人間学などの形成途上にあった新しい哲学思潮に触れ、それを基礎に自らの哲学的な基盤を構築していった。具体的な生の現実に迫ろうとする彼らの基本的な態度は、このような西洋の哲学者との交流によって培われたと考えられる。しかし、彼らは同時に、変転してやまない生の現実の根底にも眼を向け、それとの関わりにおいて生の現実を把握しようとする独自の思想を形成していった。

研究成果の概要（英文）：Many influential Japanese Philosophers studied in Europe in the 1920s and 1930s and were inspired by the new philosophical currents as phenomenology, philosophy of life, philosophical anthropology and so on.　Their fundamental attitude, to recognize the reality of life, was built through the communication with the European philosophers at that time, but they formed their original thought by looking to the underlying base of the reality and grasping the latter in relationship with the former.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2008 年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2009 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総　計	13,700,000	4,110,000	17,810,000

研究分野：　哲学
科研費の分科・細目：　哲学・倫理学
キーワード：　日本哲学、西洋哲学、比較思想、西田幾多郎

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで科学研究費補助金により「両大戦間に日欧の相互交流が日本哲学の形成・発展に与えた影響をめぐって」というテーマで共同研究を行ってきた。そこでは第１次世界大戦および第２次世界大戦の戦間期に、日本とヨーロッパの哲学者のあいだでどのような思想的な交流があり、どのような仕方でヨ

ーロッパの哲学が受容され、またそれとの思想的対決が行われたのか、さらにそれを踏まえて、日本の哲学者によりどのような仕方で独自な思想形成が行われたのかということを明らかにすることを試みた。

この研究のなかで、これまでの研究成果を踏まえつつ、つまり、西洋哲学の受容およびそれとの対決という視点を維持しつつ、日本の哲学者たちが生みだしていった思想の特徴、さらにはそれが持つ現代的な意義・可能性について考察を加える必要があるという認識を持つに至り、本研究を立案するに至った。

２．研究の目的

現在、日本哲学研究はきわめて活発化しており、とくに京都大学日本哲学史研究室を中心に組織された「日本哲学史フォーラム」はその中心的役割を担ってきた。しかしその研究活動の中心は西田幾多郎や田辺元、九鬼周造など、個々の哲学者の思想の内容や意義の解明に置かれてきた。それぞれの研究が孤立し、必ずしも明治以来の日本の哲学者たちの営為を全体として捉え、その特徴を明らかにするということは十分になされてこなかった。それに対して本研究は、そのような個別研究を踏まえながらも、重心をその全体としての特徴という点に置き、それがグローバルな哲学の議論の場においてどのような貢献をなしうるか、その可能性を問うという点に大きな特徴を持つ。本研究では、西洋哲学との比較という視点から日本哲学の特徴と可能性とを考察することを目ざしたいと考えているが、この観点を採用したのはまず第一に、日本の哲学が内発的に発展してきたのではなく、つねに同時代のヨーロッパやアメリカの哲学から影響を受け、それを受容するとともに、それとの対決を通して独自な思想を生みだしてきたと考えるからである。日本の哲学者たちが西洋の哲学から何を吸収し、どこに問題点を見いだしたのかを明らかにすることによって、日本の哲学が有する特徴をはじめて十全な仕方で明らかにすることができると考える。また、日本の哲学者たちが生みだしていった成果についても、それを西洋哲学という鏡に映しだすことによってはじめてその意義が明確になると考えている。

３．研究の方法

本研究は、日本の哲学者たちが西洋哲学に触れ、何を受容し、どこに問題点を見いだしたのか、そして西洋哲学との対決を通してどのような仕方で独自の思想を生みだしていったのかを明らかにするとともに、彼らの思想の特徴や独自性を浮き彫りにし、それが世界の哲学的な議論の場においてどのような意義を持ち、どのような貢献をなしうるのか、その可能性を問おうとするものである。

その際とくに考察の対象としたいと考えているのは、西田幾多郎、田辺元、高橋里美、九鬼周造、和辻哲郎、三木清、戸坂潤、西谷啓治、下村寅太郎などであるが、そのほとんどはヨーロッパに渡り、形成途上にあった新しい哲学思潮に触れ、そこから多大の影響を受けた。この刺激がなければ、日本哲学の展開は、われわれが目の前にしているほど魅力あるものにはなっていなかったかもしれない。その意味で、彼らの著作の分析とあわせて、彼らの留学先での研究活動に関する資料・文献の調査をも行いたい。彼らが欧米の哲学者たちと直接交流するなかで、どのように自らの哲学を形成していったのかを明らかにしていきたい。

４．研究成果

本研究で主として考察の対象として取りあげたのは、西田幾多郎、田辺元、九鬼周造、和辻哲郎、西谷啓治らである

が、そのほとんどは１９２０年代から３０年代にかけてヨーロッパに渡り、現象学や生の哲学、哲学的人間学などの形成途上にあった新しい哲学思潮に触れ、そこから多大の影響を受け、それを基盤に独自の思索を展開していった。１９年度、２０年度には、これらの人々とドイツ・フランスの哲学者とのあいだに実際にどのような交流ないし思想的な影響関係があったのか、それを通してそれぞれの哲学者のなかでどのような思想形成が行われたのかを跡づけるための基礎的な研究を行ったが、２１年度は、その成果を踏まえて、ヨーロッパの哲学者との交流を通して日本の哲学者たちがどのような仕方で思想形成を行ったのか、そしてそこで形成された日本の哲学のなかにどのような特質が見いだされるのか、とくに西洋哲学と比較した場合に、それらはどのような特徴をもつのか、また、それが当時の文脈――学問だけでなく、現実の社会――のなかでどのような意義をもったのか、さらに現代においてどのような意義をもつのかという点に力点を置いて研究を進めた。

以上の研究を通して個々の研究者が明らかにしえた成果については、研究会や合宿などにおいて発表を行い、徹底した意見交換を通して研究の深化を図った。またその成果を論文の形にまとめ、冊子体の「研究成果報告書」を作成した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８１件）

① 藤田正勝、「日本における「哲学」の受容」、『岩波講座 哲学』（岩波書店）、査読無、第１４巻、2009、255-272
② 伊坂青司「ケンペル『日本誌』のインパクト」、『表象としての日本』（御茶の水書房）、査読無、2009，215-240
③ 加藤泰史「カントとヴィンデルバント」、『アカデミア』文学・語学編、査読無、８５号、2009，59-73
④ 別所良美「超国家主義と国民国家の自己超越」、『〈昭和思想〉新論』（文理閣）、査読無、2009，181-286
⑤ 藤田正勝、「ディルタイと西田幾多郎」、『理想』、査読無、６８１号、2008、138-148
⑥ 岩田文昭「京都学派の宗教哲学と宗教思想」、『季刊日本思想史』、査読無、72号、2008、170-186
⑦ 岡田勝明「悲哀が言葉となるとき」、理想、査読無、681号、2008、29-41
⑧ 田中久文「「創造」論としての日本文化論」、『理想』、査読無、681号、2008，42～57
⑨ 嶺秀樹「田辺元と自然の問題」、『京都学派の遺産――生と死と環境』（晃洋書房）、査読無、2008、121-163
⑩ 小浜善信「遊戯する神」、『日本の哲学』、査読無、8号、2007、113-123
⑪ 高坂史朗「東洋と西洋の統合―明治の哲学者たちの求めたもの」『日本の哲学』、査読無、8号、2007，8-24
⑫ 平子友長「西洋近代思想史の批判的再検討」、『思想史と社会史の弁証法』（御茶の水書房）、査読無、2007、 5-30

〔学会発表〕（計　６８件）

① 藤田正勝、「哲学とは何か・哲学史とは何か」、京都哲学基金シンポジウム「哲学とは何か」、2009年12月24日、京都ガーデンパレス
② 平田俊博「西洋と日本の人間観の比較」、科学研究費基盤研究研究会、2009 年 12月20日、京都大学
③ 加藤泰史「和辻哲郎のカント解釈と風土的身体の問題」、日本哲学史フォーラム、２００９年１２月１９日、京都大学
④ 田中久文「日常性の深みをどうとらえるか？――和辻・九鬼・西田――」、日本倫理学会、2009年10月17日、南山大学
⑤ 伊坂青司「ケンペル『日本誌』の＜日本表象＞」、神奈川大学国際シンポジウム「表象としての＜日本＞」、２００９年１０月３日、神奈川大学
⑥ 岩田文昭「近角常観と知識人青年――三木清と武内義範――」、日本宗教学会、2009年9月13日、京都大学
⑦ 藤田正勝、「西田・田辺哲学とシェリング」、西田哲学会、2009年7月25日、京都大学
⑧ 高坂史朗「고사카 시로「東洋과 西洋의 統合」（「東洋と西洋の統合」）、釜山大学国際シンポジウム「近代における東アジアの古典形成」、2009年6月25日、釜山大学
⑨ 藤田正勝、「座談会「近代の超克」の思想喪失」、国際日本文化研究センター　国

際シンポジウム「京都学派と「近代の超克」――近代性、帝国、普遍性」、2009年5月23日、国際日本文化研究センター
⑩ 平子友長「昭和思想史におけるマルクス問題―三木清に焦点をあてて―」、京都哲学基金シンポジウム「昭和の哲学」、2008年12月16日、京都ガーデンパレス、

〔図書〕（計　３件）
① 小浜善信「九鬼周造的哲学――漂泊之魂」、郭永恩ほか訳、北京・线装书局、 2009、251
② 田中久文「丸山眞男を読みなおす」、講談社、2009、265
③ 平子友長、他「遺産としての三木清」、同時代社、2008、363
④

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
藤田　正勝（FUJITA MASAKATSU）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90165390

(2)研究分担者
伊坂　青司（ISAKA SEISHI）
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：30175195
岩田　文昭（IWATAFUMIAKI）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00263351
岡田　勝明（OKADA KATSUAKI）
姫路獨協大学・外国語学部・教授
研究者番号：00203985
小浜　善信（OBAMA YOSHINOBU）
神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：10124869
加藤　泰史（KATO YASUSHI）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：90183780
高坂　史朗（KOSAKA SHIRO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20170178
古東　哲明（KOTO TETSUAKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：10153777
平子　友長（TAIRAKO TOMONAGA）
一橋大学・社会学研究科・教授
研究者番号：50126364
田中　久文（TANAKA KYUBUN）
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号：30197412
平田　俊博（HIRATA TOSHIHIRO）
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号：60113974
別所　良美（BESSHO YOSHIMI）
名古屋市立大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：10219149
嶺　秀樹（MINE HIEKI）
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：30181960

(3)研究協力者
片山 洋之介（KATAYAMA YONOSUKE）
茨城大学・名誉教授
研究者番号：10007750